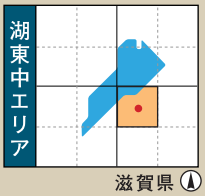
史跡
国指定

観音寺城跡（かんのんじじょうあと）

安土町石寺ほか　昭和57年1月30日指定



近江源氏佐々木六角氏の本城観音寺城は、中世城郭としては全国でも最大のものですが、その構造は、郭（くるわ）を単純に並べる構造で防御性に乏しく、むしろ居住性を重視しているようにも見えます。有力国人の連合政権的な性格の強い六角氏の体質が、城の縄張りに見えているのかも知れません。

当時のできごと	
1338年	足利尊氏 征夷大将軍となる
1532年	六角定頼 山科本願寺を焼く
1568年	信長、義昭を奉じて入京

佐々木六角氏と観音寺城

観音寺城主、佐々木六角氏は、宇多源氏を名乗り、源成頼を家祖とし、成頼の孫の経方が佐々木庄小脇館に住み、佐々木氏を名乗ったことに始まります。その後、盛衰がありますが、治承４年(1180）源頼朝の挙兵に参加し、功あり、佐々木定綱が近江国の守護職となり、実質的な近江支配の基礎を築きます。その後、佐々木信綱の代に四家に分かれ、湖南六郡を佐々木六角氏が、湖北六郡を京極氏が分国支配する体制となり、戦国時代に入ります。

六角氏は同族の京極氏とは違って、最後まで強力な戦国大名となることができませんでした。それは、湖東地域の高い生産性を背景とした、自立性の強い国人層に対する支配権を維持するためには、彼らとの連合政権的な支配形態をとらざるを得なかったためです。事実、在地国人達の離反がきっかけとなり、六角氏はその力を落としていきます。

観音寺城の構造は、このような六角氏の政権の体質を表すように、広い屋敷を持つ郭を多数配していますが、明確な防御施設がなく、規模こそ大きいものの、非常に単純な構造となっています。このため六角氏は、有事に際しては観音寺城で戦うことをせず、一旦退いて勢力の回復を待って、帰城する戦術を常としていました。



観音寺城石垣と門

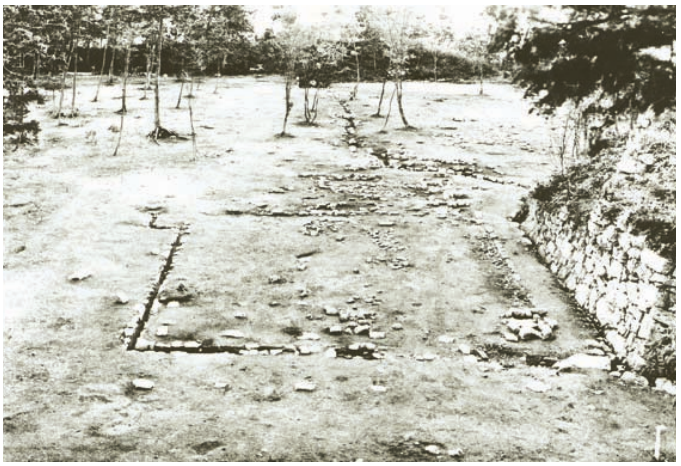
観音寺城の構造

観音寺城は、湖東平野の中心にある独立丘陵、繖山（きぬがさやま）の南半分を中心に築かれています。南麓は中山道に面し、西麓は琵琶湖に面する、水陸交通の要衝の地に位置します。この観音寺山に六角氏が城砦を築き始めたのは、南北朝の争乱の頃と記録されていますが、この時期の遺構は見つかっていません。本格的に城郭としての整備を行うのは応仁の乱以降と考えられ、大永5年（1525）の六角定頼による江北出陣の際には、城に留守居役を置くほど整備されていたようです。天文元年（1532）には、足利将軍を迎えていますので、この頃、居住性を重視した城がほぼ完成したと考えられます。さらに、鉄砲の伝来による戦術の変化に対応し、1550年代頃に石垣を整備し、今日見られる城構えとなりました。永禄11年（1568）六角承禎が、信長の攻撃を受け、戦わず城を放棄したことにより、観音寺城の歴史に幕が下ろされます。

現在確認されている郭の数は、正確には把握されていませんが、至るところに削平された平坦地を確認することができます。本丸、平井丸、落合丸、池田丸といった郭の発掘調査の結果、礎石を用いた大規模な建物、石組の水溜、石組の水路などの遺構が見つかっています。



観音寺城遠景



本丸　発掘調査状況



本丸　発掘調査状況

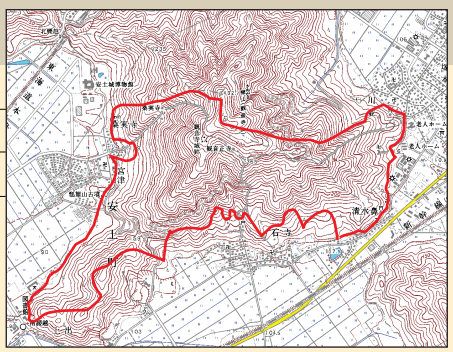
関連する文化財

後藤館跡（八日市市）	学習シートNo.044
鯰江城跡（愛東町）	佐々木氏が織田信長によって滅ぼされた際の最後の戦いの場
甲賀城館群（甲賀郡全域）	甲賀五三家を中心とした地侍達が築いた城郭群
佐生日吉城跡（能登川町・五個荘町）	佐々木氏の家臣後藤氏の城。初期の石垣が特徴
京極氏城館（伊吹町）	学習シートNo.033

もっと深く知りたい

安土城考古博物館	☎0748-46-2424	蒲生郡安土町下豊浦6678
伊吹山文化資料館	☎0749-58-0252	坂田郡伊吹町春照77
彦根城博物館	☎0749-22-6100	彦根市金亀町1-1

観音寺城跡へのアクセス　JR琵琶湖線　安土駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔日本城郭体系〕新人物往来社　〔観音寺城跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月